

# 「火鈴<sup>こうりん</sup>さま」の現在

## －瑞巖寺・年中行事に同行して－

瑞巖寺宝物課 学芸員 太田峻平

### 1. はじめに

瑞巖寺では、大晦日の夜から元旦の早朝にかけて行われる独特の年中行事がある。住職代理の僧侶が「火鈴<sup>こうりん</sup>」という大きな鈴を打ち振り、般若心経を繰り返し唱えながら、松島町内（行政上の松島町松島町内）の寺社仏閣や史跡、特定の家々を巡拝して歩く。この巡行は翌年の防火・息災を祈念するもので、巡行する僧侶を地元民は「火鈴さま」と呼んでいる。

巡行には火鈴さま役の僧侶（以後、役僧と略称）の他に、先導役として在家のお伴がついている。巡行の順路は寺内側では共有されていない。役僧も毎年変わるため、順路の詳細はお伴のみが知っている。大宮司<sup>だいぐうじ</sup>哲氏（75歳）はお伴を務めて25年目を迎えるが、2023年を最後に引退し、以降は瑞巖寺職員が務めることになった。2023年の大晦日は筆者を含め、職員2人が初めて行事に参加した。同行の主な目的は、お伴の引継ぎと順路の確認をするためであった。近年火鈴さまの順路は、立ち寄る家や時間配分によって年ごとに変わっているとの話がある。それゆえ旧来の順路と比較し、本来の順路について検討する必要があった。

これまで火鈴さまに関する調査は2度行われている。1981年には三崎一夫氏が調査し、行事のあらましや由来に関する基礎的な研究として、『瑞巖寺博物館年報(第8号・第11号)』に論考が掲載された（三崎1981・1985）。1991年には当館学芸員の千葉が、火鈴さまの立ち寄る家々を対象とした聞き取り調査を行い、当時の火鈴さまの順路も記録している。以降、火鈴に関する調査は行われていない。本稿では、まず令和5年に行われた火鈴さまの巡行を記録し、先行研究の事例と比較する。それらを踏まえて、火鈴さまの現在と今後の展望について若干の考察を述べていこうと思う。

### 2. 火鈴さまに関する諸要素

#### 2-1. 火鈴さまとは

「火鈴」とは本来、<sup>ぜんでら</sup>禪寺で火元を注意するために振る釣鐘形の小さな鈴である。行事で使われる瑞巖寺の火鈴は、高さ15センチ、鈴径16センチと比較的大きめのサイズになる（写真1）。「火鈴さま」という行事自体の起源は定かではない。ただし、行事に使われる「火鈴」の由来は記録に残されている。記載は寺田能円の『松島案内記』（1811年）、桜田周輔の『松島図誌』（1820年）、舟山光年の『鹽松勝譜』（1907年）にあり、これより遡る文献は見られない（写真2）。これらの文献に書かれている内容は同様のもので、以下のように

まとめられる。「鎌倉時代末期、瑞巖寺の前身・円福寺6世の空巖慧（覚満禅師）が法力で中国径山寺の火災を透視し、庭の石に水をかけて消火を手伝った。その謝礼として径山寺から秘蔵の火鈴が贈られ、その鈴を打ち鳴らしながら巡行し防火祈願とする」。現在、行事で使われる火鈴は戦後に模造した複製品で、径山寺から贈られたと伝わる火鈴は瑞巖寺宝物館に収蔵されている。由来にある「庭の石」は防火石と呼ばれ、円通院の山門右側・覚満禅師墓碑の手前にある石のことを指す。『松島図誌』によると、元々は現在の円通院と天麟院の間に存在した覚満禅師開創の瑞巖寺塔頭・法雲庵の庭にあったとされる。

ところで火鈴さまには多くの民間伝承が存在する。特に火伏せの行事として伝わっていることもあり、「巡行した地区は火災が起きない」という言い伝えがよく語られる。さらに「火鈴さまの姿を見ると目が潰れる」とも言われ、地元民の間では古くから巡行の姿を見ないよう固く戒められてきた。他には「火鈴の音を聞かずに寝ると五臓六腑が腐れる」、「火鈴さまには今年死ぬ者が見える」、「火鈴さまが雄島を巡行するとこの年死ぬ者が見えるが、役僧はそれを他言してはならない」などがある（三崎 1981）。1991年の聞き書きの中には「火鈴の格好は死に装束である」、「役僧が首からかける火鈴の布を腹巻きにすると安産である」というものが記録されている。

## 2-2. 先導役のお伴

先に挙げた3冊の文献を見る限り、本来役僧は単身で巡行していたようで、いつしか先導役としてお伴がつけられるようになった。そのきっかけは、役僧が瑞巖寺鎮守・日吉山王神社の階段を降りるときに転倒し、火鈴を池に沈めて亀裂を入れてしまった事だったという（1981 三崎）。

実際に宝物館所蔵の火鈴には亀裂が入っている。『松島図誌』の火鈴部分の一部を要約すると、「先年、井戸の中に火鈴を落としたためひびが入っている」とあり、『鹽松勝譜』には「執事僧が酔って躓き、火鈴を落として石に当ててしまった。探して見つけたが、ひびが入っていた」と記されている。いずれも、火鈴を落とした拍子に亀裂が入ってしまったという内容である。しかしお伴がついた経緯については書かれていない。

千葉が行った聞き取り調査の中では、当時のお伴である西沢研氏がお伴の始まりについて話していた。西沢氏によると、西沢家の祖先が神社の階段から転んだ僧侶を気の毒に思い、以来、提灯を持って火鈴の足下を照らして巡行を手伝い始めたのだと語る。これらは西沢家をはじめとした先導役の自発的な行為であるため、火鈴さまのお伴は中門で出立を迎え、帰山は中門まで送り届けることになっている。

西沢研氏は、大宮司哲氏の先代のお伴である。西沢氏の前は桜井勇作氏が務め、地域住民

からは「ペンちゃん」とあだ名がつけられていた。これは火鈴の音が「ペンキペンキ」と聞こえるため、住民達が親しみを込めてそう呼ぶという。その前任は西沢武治氏、さらにその前は武治氏の父・金吾氏、祖父・長太郎氏と西沢家三代が務め、それ以前は蜂谷氏(紅蓮屋)、戸田氏(豆腐屋)などが先導役を務めた。お伴の人選に特別な決まりは無いという。桜井氏の場合、西沢家とは縁戚関係であったが、虚弱な体を克服するために願い出たことが理由だった(1981 三崎)。そのため、一族が代々役割を引き継いでいるという訳ではない。

役僧は住職代理として、主に瑞巖寺専門道場の雲水から選出される。寺内の事情によっては、住職や瑞巖寺職員の和尚が担当する年もあった。先に述べたように、寺側は道順を把握しておらず先導役のみが知っている。さらに後述する作法の内容などの、当夜の一切は先導役に任せられる。つまり行事は、寺側の関与が全く無い状態で行われているという特徴がある。

### 3. 火鈴さま同行記

ここでは当夜の火鈴さまの巡行についてまとめていく。行事は改旦行事次第(図1)に沿って進められ、大晦日午後8時半から元旦午前4時にかけて行われる。8時半になると庫裡・副司寮で茶礼が始まり、瑞巖寺住職の同席の下、執事長・役僧・お伴にはお茶が出される。続いてお膳が出され、雑煮とあんこ餅、他に5つの小皿に煮しめ、ほうれん草のおひたし、数の子等の小菜が用意された。茶礼が終わると、役僧とお伴は身支度を始める。役僧の格好は雲水衣の上から白布で上半身を覆い、頭巾を被って、足にズンベ(藁沓)を履いた姿になる(写真3)。このズンベは去年まで山形県の天徳寺に依頼していたが、作れる人が居なくなってしまう為、今年から違う仕様になったという。ちなみに当夜では、愛宕裏地区から水主町に戻る際にズンベが壊れてしまい、急遽、庫裡に飾ってある昔のズンベに履き替えるということがあった。そして後述することになるが、出立の直前に晒布で結ばれた火鈴が首にかけられる。お伴の格好には特に決まりはない。大宮司氏は自前の防寒着に瑞巖寺の提灯を持ち、役僧と一緒にズンベを履いていた。瑞巖寺職員は自衛消防隊の刺し子に、カッパを着込んで提灯を持った。

支度が整うと雲版が打ち鳴らされ、僧侶一同は食堂の韋駄天前に移動する。役僧が韋駄天を三拝すると、火鈴が首にかけられる。そして火鈴を打ち振り、僧侶一同で般若心経三巻を唱え始める。韋駄天での諷経の後、般若心経を唱えながら庫裡廊下を渡って本堂へと向かい、室中(孔雀の間)・本尊の前で三巻を唱える。午後9時、室中から本堂中庭に出て中門へと進み、中門で待機していたお伴と合流し出立する。瑞巖寺では役僧の出立と同時に、除夜の鐘が打ち始められる。

その後、役僧はお伴の先導に従って巡行し、般若心経を唱え続けながら歩く。途中、瑞巖寺の鎮守や史跡に般若心経を三巻、特定の家には一巻を諷経して回る。図4は、国土地理院の地図をもとに当夜の順路を表したものである（図4）。役僧は瑞巖寺の山門を出ると、まず初めに防火石と円通院本堂へ進み、それぞれに三巻を諷経。続いて参道に進み、<sup>うなぎづか</sup>鰻塚で三巻を諷経する。

瑞巖寺の総門を出ると、<sup>すさきまち</sup>須崎町の家々を巡拝して回る。立ち寄る家では玄関の外灯に明かりがついているか、提灯が下げられる。玄関や縁側には机が出され、机の上には梅湯や酒、箸、線香、灯明、お布施が準備されていた（写真4）。役僧は机の前で諷経を終えると、箸で梅湯を軽くかき回し、口に近づけて飲むふりをして箸を置く。そしてお布施を受け取り、次の家へと向かう。これが火鈴さまの作法である。残していった梅湯は家族間で飲み回され、飲むと無病息災になれると言われている。先述したように行事には、「火鈴さまの姿を見ると目が潰れる」という伝承がある。そのため迎える家では、火鈴さまの姿が見えないように部屋を暗くし、家の奥で巡行が終わるまで静かに控える（写真5）。これは旧習のようで、須崎町や水主町の家々に多く見られた。当夜の様子を見る限り、迎え方は家によって様々であった。例えば部屋の明かりをつけたまま、机の後ろに座って合掌しながら火鈴さまを迎える家もあれば、部屋を暗くした状態で、諷経中は頭を下げて迎える家も何軒か見かけた。さらに明かりはつけた状態で、家主は全く出てこないという家もあった。大宮司氏は例年立ち寄ることになっている家でも、玄関に明かりがない家や、門扉が閉まっている家では諷経しないと話していた。実際、当夜では立ち寄ったものの準備がされていない為、立ち寄らなかった家は何軒もあった。大宮司氏によると、火鈴さまを迎える準備がされていない家の中には、親類が亡くなったから今年は迎えないといった理由で立ち寄らない家もあると話していた。立ち寄って欲しい、立ち寄らなくて良いという場合は大宮司氏に直接依頼するか、瑞巖寺経由で大宮司氏に伝えられ、火鈴さまの順路に反映されるという。

須崎町の家々を巡拝した後、<sup>はちまんしゃ</sup>八幡社・<sup>ごだいどう</sup>五大堂でそれぞれ心経三巻を諷経すると、駐車を抜けて国道45号線を北上。<sup>よげんどう</sup>普賢堂地区の道沿いにある家々を回り、国道45号線を折り返し、途中で小松館方面へ抜けていく。小松館に到着すると、ここで10分ほどの休憩を挟んだ。休憩後、小松館周辺の家々に何軒か寄り、来た道に戻って国道45号線を南下する。そして<sup>せんざい</sup>仙随地区の家々を巡拝しながら<sup>ふくうたばし</sup>福浦橋へと進み、橋の<sup>たもと</sup>袂で三巻を唱える。それを終えると須崎町の方へ向かい、松華堂と鈴木屋物産店間の通りから水主町へ入る。水主町は瑞巖寺の東に隣接する一画で、仙台藩の御座船を操った水主衆が暮らしていた地区である。この地区ではほとんどの家を巡拝することになっている。水主町の家々に立ち寄りながら、蓮池を過ぎて<sup>やうとくいん</sup>陽徳院へ向かっていく。午前0時過ぎ。陽徳院に着くと山門が開かれ、待機していた

僧侶と共に本堂前で本尊に三巻を諷経する。陽徳院で小休憩の後、陽徳院裏の瑞巖寺職員駐車場の方まで登り、鳥居から葉山神社を拜む。葉山神社を終えると蓮池まで戻り、水主町を巡りながら愛宕裏地区へと進む。途中、水主町の西岡家で休憩をとった。休憩後は愛宕神社へと向かい、鳥居から拜む。愛宕地区の家々を巡り、新富亭を過ぎた坂の途中から紫神社・松島明神・大仰寺に対して遙拝する。そこから来た道を引き返し、帰路の途中で垣の内地区に向かって三巻を唱えた。

水主町を出て松華堂の角まで引き返すと、国道 45 号線に沿って松島海岸駅の方へ進む。田町の家々を巡り、天麟院まで来ると境内の 4 箇所を諷経して休憩を挟んだ。役僧にとってこの巡行は過酷であるため、このように途中で休憩を挟むようにしている。役僧は巡行中ずっと般若心経を唱えており、出立して間もない頃にはすでに喉が涸れてしまっていた。休憩箇所では時折お酒が出されるが、体は温まっても、さらに喉が渴いてしまう。頭から上半身を包んでいる白い布は、寒さを遮るための厚い生地になっている。役僧によれば、火鈴を打ち振りながら経を唱えると、自分の声が遮られてしまって声量が分かりづらいと話していた。当夜は例年に比べ気温が高く、雨の中の巡行だった。それにより、汗だくで歩き、かいた汗で体を冷やしてしまうという事態になった。大宮司氏によると、過去には大雪が降りしきる中で巡行した時もあったという。その際には歩行が難しくなり、時間がかかって大変だったと話していた。この休憩は、役僧が午前 4 時に帰山するための時間調整の意味もあり、滞在時間も場所によって異なる。休憩場所以外では、大宮司氏が時計を見ながら「もう少し急いで拜んでける」、「時間に余裕があっからゆっくり拜んでもらってかまわねえんだ」と役僧に指示を出して時間の調整をしていた。今年は巡行のペースが例年より 1 時間ほど早かったようで、天麟院では長めの休憩を取り、以降は比較的ゆっくりとしたペースで巡った。

午前 3 時頃、休憩を終えると日吉山王神社へ向かい、神社と鳥居正面の湯殿山塔などの石碑群を拜む。そして松島海岸駅へと進み、真山地蔵堂を諷経。続いて松島離宮の駐車場から、雄島に対して心経三巻を唱えた。その後は来た道を戻りながら三聖堂に立ち寄り、瑞巖寺の総門へ向かう。午前 4 時に差し掛かる頃、瑞巖寺総門前から観光棧橋を臨み、金華山・明けの明星に対して三巻を諷経。そして総門から真っ直ぐ瑞巖寺の山門へ進み、法身窟で三巻(写真 7)。諷経の後、役僧が中門へ到着すると除夜の鐘が打ち上がる。お伴の先導は中門までのため、門が開かれると執事長の先導で役僧のみが本堂へ進んでいき、中門はすみやかに閉ざされる。役僧は本堂へ進んだ後、出立とは逆の順番で室中の本尊、食堂の韋駄天を諷経し、韋駄天を三拜した後に火鈴が外された。役僧とお伴は装束を外し、副司寮で茶礼・食事を済ませて行事の一切が終了する。以上が 2023 年の火鈴さまの巡行である。

## 4. 順路の歴史的変遷

### 4-1. 過去の事例

この節では、順路の変遷についてまとめていきたい。瑞巖寺宝物館に、『年中行事録草稿』・『舊曆年中行事』という二冊の収蔵資料がある。これは瑞巖寺 124 世鄧州全忠（南天棒）<sup>とうじゅうぜんちゆう なんてんぼう</sup>が、瑞巖寺の年中行事を地元の古老から聞き書きし、寺内の年中行事を実行する際に典拠としたものである。火鈴さまについての記載は『舊曆年中行事』の「十二月之部」にあり、役僧が選ばれる日程、晦日の次第が書かれている。本書の文末には「備考」という項目に、火鈴が巡行する順路が黒インクでペン書きされていた。三崎氏によると、これは昭和 10 年（1930）代に加筆されたものと推測しており、順路の他に諷経すべき般若心経の巻数も書かれている（1981 三崎）。資料を見る限り、現在の順路は加筆された内容が基になっていることが窺える。現在と異なるのは、瑞巖寺参道の稲荷社や三十三観音を諷経しており、鰻塚は拝んでいない。立ち寄る家々は須崎町・田町・水主町の家々を巡っており、葉山神社をはじめとする瑞巖寺鎮守の寺社仏閣や、雄島島内の史跡を巡拝していたと推測できる（図 2）。諷経の回数も現在と異なる箇所があり、海岸（観光棧橋）では般若心経を六巻、法身窟では五巻と記されている。帰山は午前 3 時と書かれており、現在よりも短い時間で巡行していたようだ。

続いて 1980 年代～1991 年の順路を見て頂きたい。図は三崎氏と千葉の記録を基に作成したものである（図 3）。両者の調査年代を比較した結果、順路に大きな変化は無く、ほとんど同じ順路を辿っていたことが分かった。現在の順路と比較すると、巡行範囲は広がったように思える。葉山神社には線路を越えて社務所まで進んでおり、かつては山頂の社殿まで登ったという。さらに日吉山王神社と向かいの石碑群の先にある町頭地区や、雄島周辺の家々、雄島の島内にも立ち寄っている。休憩場所は陽徳院前の浴堂、西岡家、渡辺家、西沢家、奥田家の計 5 カ所で、現在と異なる場所だった。

立ち寄る家の軒数を見てみると、三崎氏の調査時に 60 数軒、千葉の時には 69 軒であった。では、軒数はいつ頃から増え始めたのだろうか。前回の調査結果や巡行地区の変遷を踏まえると、軒数の増加は 1960 年代以降であると推測している。1991 年に行われたアンケート調査からは、水主町や須崎町の家から分家し、新たに埋立て・造成された地区へ移住した家が見られた。普賢堂地区の例を挙げてみると、旧習では巡行していない地区で元々湿地だったという。国土地理院の空中写真（1948 年～1968 年）からは、田畑として利用されている様子が確認できる。普賢堂地区の住人はいずれも、須崎町や水主町といった別の場所から移住してきた人達で、火鈴さまを迎え始めたのは 1960 年代初頭であったことが明らかとな

った。他の地区でも相似した事例が見られており、分家して移転した場所で立ち寄ることを依頼する家や、町外から引っ越してきた人達が、火鈴さまの噂を聞いて依頼していた事例も見られる。大宮司氏が言うには、軒数が増加したことで帰山する予定の4時に間に合わなかった年もよくあったという。

#### 4-2. 火鈴さまの現在

2023年になると、立ち寄る順番や道程は簡略化されている様子だった(図4)。まず、以前は最後に諷経していた円通院と防火石は、山門を出てから最初に向かうようになっている。これは円通院側からの希望で、5・6年前から先に拝んでもらうようになったという。葉山神社は陽徳院裏、瑞巖寺職員駐車場付近の鳥居で諷経を行っており、以前のように東北本線・仙石線の線路を越えて社殿の方まで行くことはなくなっていた。日吉山王神社の後に向かう、町頭地区の家々にも立ち寄ることはなくなり、雄島も島内を巡らず、地蔵堂近くの松島離宮の駐車場から雄島方面に向かって仰拝している。大宮司氏は、「雄島まで行ってしまうと、間に合わなくなっから」と話していた。このことから、2023年の順路で雄島や葉山神社までの道のりが簡略化されてきたのは、帰山の時間を考慮した上で変更し、立ち寄る家々を優先して回るようなルートへと変化してきたことが予想される。逆に新たに追加された箇所として、愛宕裏での諷経から陽徳院へ戻る途中、垣の内に向かって三巻を唱えていた。これがいつ、誰に依頼されて行うようになったのかは不明である。

軒数を見てみると不在を含めて42軒で、前回の調査時と比較すると大幅な減少傾向であったことが分かる。要因としては、高齢化や、地域住民の火鈴さまに対する認識の変化が考えられる。大宮司氏によると、寄っていた家の人から「夜遅いのはやんだから、うちにはまわんねでけろ」と言われることが多くなったと話していた。ご高齢の方にとって、夜遅くまで起きて待っているのは辛いのだという。なるべく早く来て欲しいという要望は、1991年のアンケート調査でも見られた事例だった。高齢化の問題以外では、代替わりや先代が亡くなったタイミングで、もう迎えることはしないと決めた家もあった。他には須崎町のように、商売をしなくなった家が賃貸となり、他所から来た人達が営業をしているため、火鈴を迎える必要がなくなった事例もある。

#### 5. まとめ

この節では比較したことを踏まえ、若干の考察を述べていきたい。比較の結果、行事の主要素と思われる瑞巖寺鎮守の諸堂を巡る様子に変化はなかった。一方で火鈴さまが立ち寄る家々は、宅地造成や親類関係の移住によって広がりを見せていくことになる。行事は寺内

に止まらず、地域社会の年中行事として定着していき、順路も地域住民のニーズに応えながら変化してきたことが明らかとなった。しかし行事に対する関心は、地域社会の高齢化や世代交代といった事情によって、次第に薄れている現状にある。今後、地域社会の人々の生き方・暮らし方に伴い、行事の在り方や順路も変化していくだろう。

火鈴さまは瑞巖寺の年中行事でありながら寺側の関与は一切無く、順路や習わしは地域の人達によって伝えられてきたという特徴を持っている。つまり瑞巖寺と地域住民によって形づくられてきた伝統行事だと言えるのではないだろうか。地域の人々が「火鈴さまに立ち寄って拜んで欲しい」という願いは、伝統的な地域社会に根付いた事象として歴史的価値を見出すことができるだろう。今後の課題としては、行事とそれに対する地域住民の意識が、歴史的価値のある事象として地域内で共有されること。そして、変化してゆく世相の中で、行事の本質を守りながら次世代へと受け継いでいくことが課題となる。

※水主町・須崎町・田町は通称であり、行政区の地名ではない。

## 参考文献

- ・「火鈴」コトバンク【<https://kotobank.jp/word/%E7%81%AB%E9%88%B4-505255>】2024年3月3日14:00閲覧
- ・寺田能円『松島案内記』1811 瑞巖寺宝物館蔵
- ・桜田実(周輔)『松島図誌』1821 瑞巖寺宝物館蔵
- ・舟山光遠(万年)『鹽松勝譜』1907 香雪精舎 瑞巖寺宝物館蔵
- ・三崎一夫「火鈴様見聞記－瑞巖寺除夜改旦行事－」瑞巖寺博物館編『瑞巖寺博物館年報第8号』1981 瑞巖寺博物館 p.2－11.
- ・三崎一夫「火鈴様見聞記捨遺」瑞巖寺博物館編『瑞巖寺博物館年報第11号』1985 瑞巖寺博物館 p.76－78.
- ・松島町史編纂委員会編『松島町史(資料編II)』1989 松島町
- ・松島町史編纂委員会編『松島町史(通史編II)』1992 松島町
- ・千葉千恵「立ち寄る家々へのアンケート」『瑞巖寺年中行事 火鈴様についての報告』1991
- ・国土地理院出典：空中写真(1948・1956・1961)／地図(松島町内)





写真 1 火鈴 (瑞巖寺宝物館蔵)



写真 2 桜田周輔『松島図誌』(瑞巖寺宝物館蔵)



写真 3 火鈴さまの姿



写真 4 火鈴さまのお供え物



写真 3 立ち寄る家での諷経

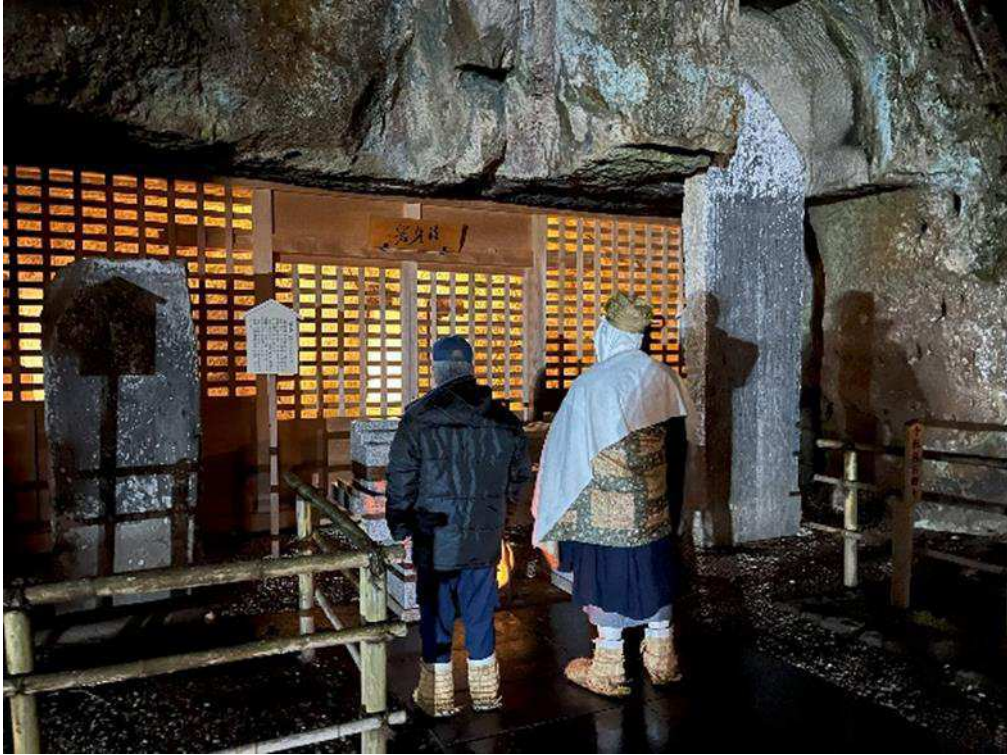


写真 4 法身窟での諷経

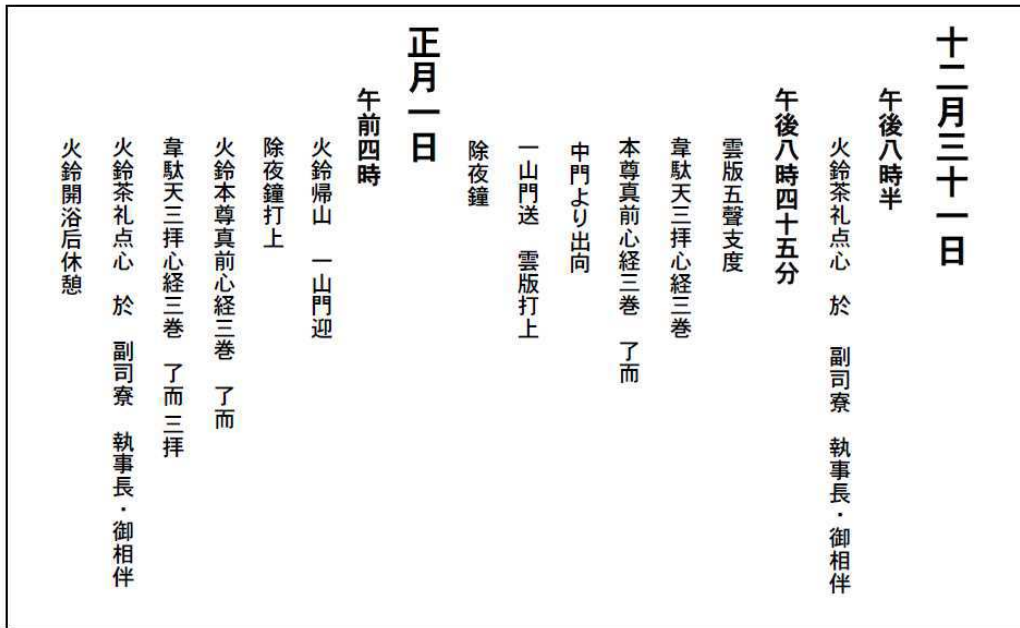


図1 除夜改旦行事 (火鈴部分を抜粋)

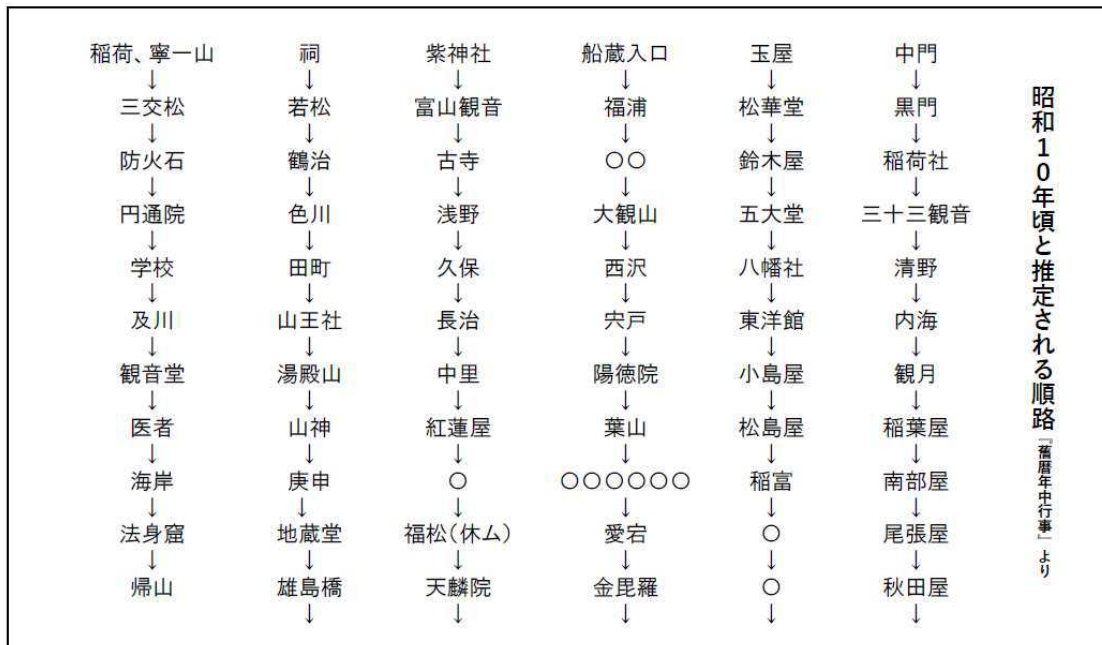


図2 昭和10年頃と推定される順路 (『舊曆年中行事』を参考に作成)

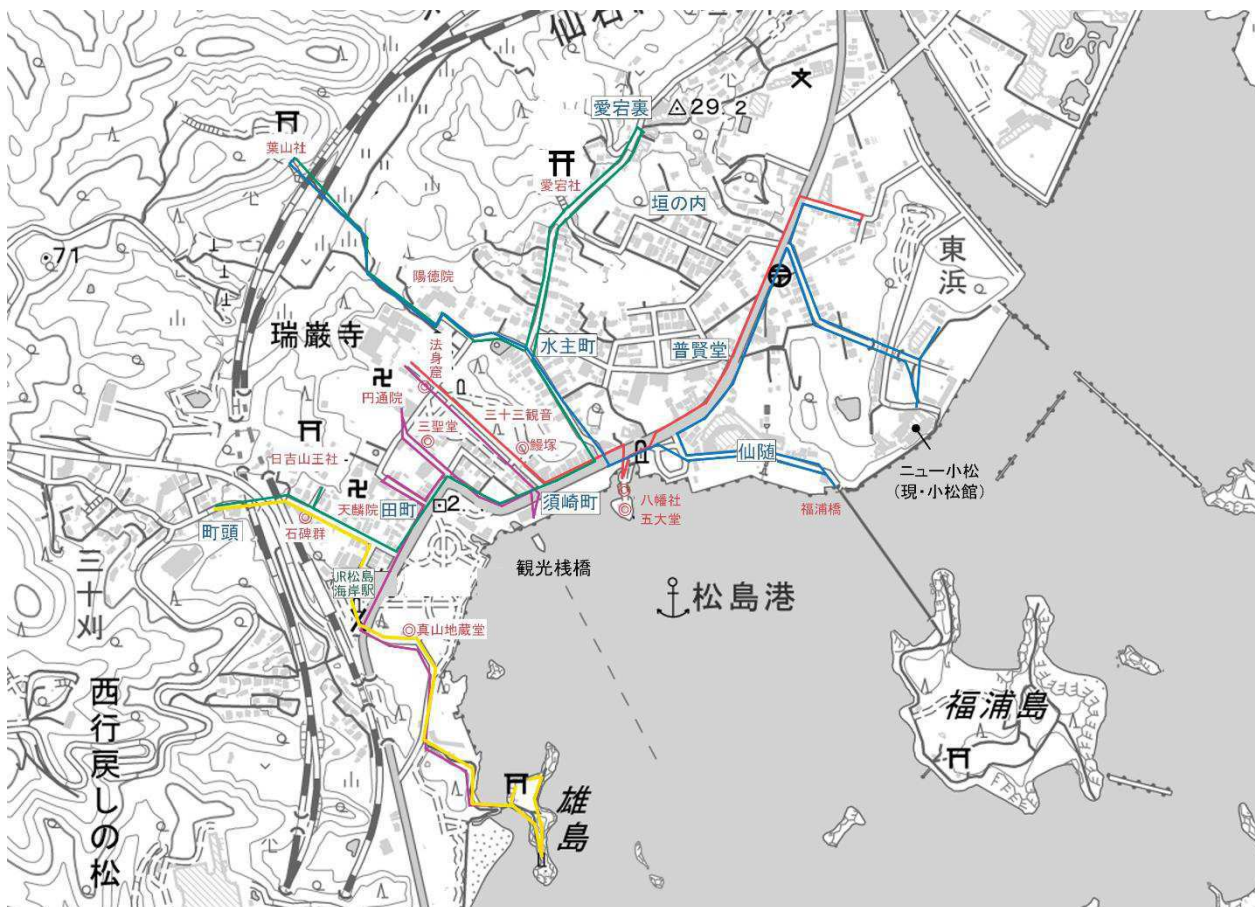


図 3 1981年～1991年代の火鈴さまの順路

- ① — 中門—門前—五大堂—普賢堂
- ② — 普賢堂—ニュー小松—福浦橋—水主町—陽徳院—葉山社
- ③ — 葉山社—水主町—愛宕裏—新富山—田町—山王社
- ④ — 山王社—松島海岸駅—雄島
- ⑤ — 雄島—天麟院—三聖堂—円通院—観光棧橋—帰山

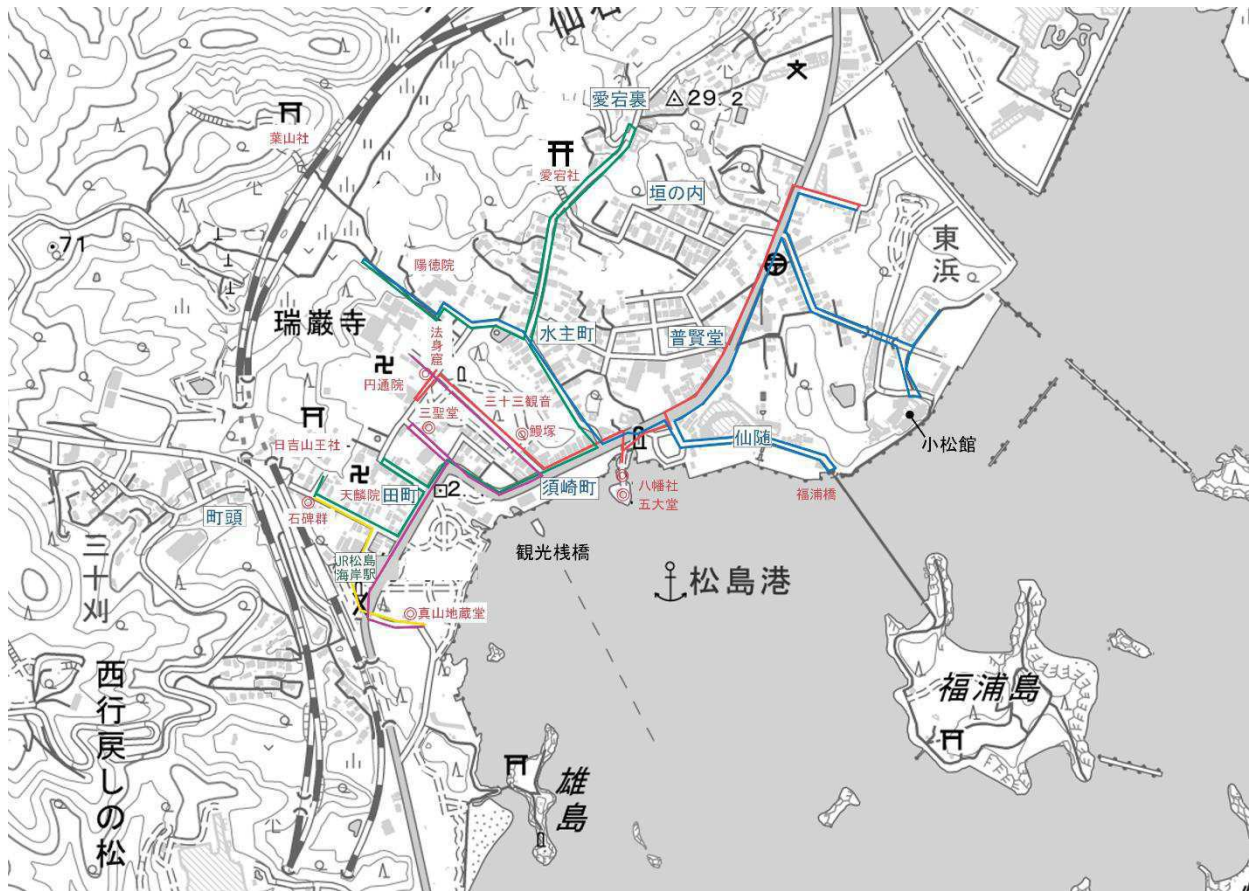


図 4 2023 年の火鈴さまの順路

- ① — 中門—円通院—門前—五大堂—普賢堂
- ② — 普賢堂—小松館—福浦橋—水主町—陽徳院—葉山社
- ③ — 葉山社—水主町—愛宕裏—新富山—田町—山王社
- ④ — 山王社—松島海岸駅—雄島前
- ⑤ — 雄島前—天麟院—三聖堂—観光棧橋—帰山